



イニシエーションスピーチ

木村 良成 会員

ロータリーの職業分類では「仏教」となっておりますが、私は浄土宗大光院の住職だけでなく、様々な経験をし、様々な側面を持った人間であります。

戦前、長崎より上京した祖父は小西六に勤務し、先輩と一緒に日本で最初の銀塩写真のカラーフィルムを開発致しました。その後独立、東京都八王子市で昭和29年12月に(有)木村熱経済研究所を設立しました。

木村熱経済研究所は祖父から父、そして私へと継承されると思われていたようですが、私は小学生の頃から4つの夢が在りました。学校の先生になりたい、お坊さんになりたい、東京大学へ進学したい、そしてトヨタのクラウンに乗ることでした。クラウンは勤めてから乗りましたので、現在、4つのうち3つが叶ったこととなります。

父は当時、木村熱経済研究所の専務取締役役に就任しておりましたが、実際会社経営には向かなかったようで、50歳の時にストレスにより西方に旅立ちました。私は今年6月、父が亡くなった年齢となり、母親から「50歳になったのだから、あなたがお父さんの代わりに好きなように生きなさい。」と言われ、ロータリークラブ入会を決意しました。

母は45歳で夫を亡くし、訳もわからないまま当時の(有)木村熱経済研究所を継承しました。しかし、母は商才があったようで、有限会社から株式会社に、そして、新社屋も建設致しました。その後ロータリークラブに誘われ、第2750地区東京八王子北ロータリークラブに入会し、第2580地区も含め、東京都多摩地区では初の女性会長を務めました。母親は私を「いつかはロータリアンに」と思っていたようですが、今はまだ時期ではないと反対しておりましたので、八王子北ロータリークラブ会員の弁護士に相談したところ、「入って活動した方が良いではないか」と背中を押されました。

4月の例会で私を紹介してもらった東京池袋ロータリー衛星クラブの塗木君は、都立池袋商業高校時代の教え子です。塗木君に東京お茶の水ロータリークラブが良いといわれ、土居さんを紹介して頂き、入会に至りました。

現在は寺院の住職ですが、主に大学で教鞭もっております。最初は埼玉県立の商業高校に商業科教員として採用されました。本当は社会科地理の教員になりたかったのですが商業科教員が足りないということでそのまま商業科。専門は会計学です。高校に勤務しながら大学院で学び、財務会計(商学)で修士課程を修了致しました。その後、博士課程では、教育学研究科の博士論文は商業教育について著しました。しかし、商業教育についての博士論文の先攻研究者は日本では存在しなかったため、たまたま私が最初になってしまいました。このことは、周囲には知られないようにしております。

8月初旬には、商業科教育法を道東の釧路公立大学で教えて参りました。道東には教員がいないため、日本各地から専門の教員を呼び、集中講義を行います。私も90分授業を1限から4限まで通しで3日間行いました。それをもう3日程行うのですが、さすがに6日連続は無理なので冬に分けています。もう一方の職業指導の先生は冬が苦手とのことで、私の後に6日間連続で行います。先生も大変ですが、もっと大変なのが学生です。朝9時から16時20分まで、9日間連続授業を受けなければなりません。「君たち大変だね。」と4

限目の最初に糖分補給のためのお菓子を配りながら授業を展開します。

現在、教育に関するトピックが2つ世の中の話題となっております。

まずは、ランドセルが重たいという状況下での「置き勉」という問題。しかし、昔と今がどう違うかということをもスコミは取り上げていません。そこで、実際に計測してみました。現在、小・中・高で実際に使われている教科書はB5版です。再生紙が使用されておりますが、昔と比べると良質な紙が使われています。昔の教科書は、A5版であり良い用紙ではありません。この本は35歳の時に私が著した人生初の単著本「商業科教育法」です。実は地元神保町の古本屋さんでこの本を偶然見つけました。その時の想い。「古本屋 自分の本を見つけ出し 嬉しくもあり 悲しくもあり」

話を戻しますが、現在の教科書を100%とすると、下記ようになります。

	A 5 版 (昔)	商業科教育法	B 5 版 (現在)
重量	256(g)	374(g)	510(g)
比率	50.12 (%)	73.33 (%)	100 (%)

確かに今の児童達が重いランドセルを背負っていることは理解できます。単に「重たいので置き勉」ではなく、昔よりも倍の重さになったときちゃんとしたデータに基づいて、文部科学省も適切な説明を行い、対処していかなければならないでしょう。

もう一つ、スポーツ界で根性論が問題になっております。つい最近も体操界でスキャンダルがありました。なぜ、このようなことが続くのでしょうか。

やはり部活動に関する歴史の無理解が一つの理由だと考えられます。部活動がなぜ始まったのかというと、戦後まもない昭和22年度に新制中学校が発足し同時に同年末で青年学校が廃止となりました。昭和23年には新制高等学校が発足しました。当時の中学生男子は、第2次世界大戦中に教育を受け、「戦争でお国のために命を捧げる」ということを強く信じていた生徒ほど、敗戦のショックが多かったそうです。敗北感により、授業も受けずに学校の側の木の下や神社等で喫煙して荒れた生活をしていました。そこで新制中学校の教員が立ち上がり、荒れた生徒の心を救うために奉仕活動として行ったのが、部活の始まりです。戦前の旧制中学校の教員はほとんどが新制高等学校の教員となり、青年学校の先生達が新制中学校の先生となりました。旧青年学校の先生達の奉仕で荒れた心をスポーツ等つまり部活動に向けることによって荒れた心を正常化しようとしたのです。青年学校は軍隊への入隊を促進した教育課程であったため、青年学校の先生自体も根性論と愛の鞭は当然部活には付きものでした。現状から分析すると、時代の変わり目であると感じる次第です。

私個人も、教員1年目は校長室に呼ばれ、新米教員として生徒に馬鹿にされないようにまずは出席簿で生徒が痛く感じるようなたたき方を教わりましたが、今では昔の出来事となってしまいました。

教科書の置き勉問題もスポーツ界や部活道も歴史を知ることが大切ですが、他の事象についても歴史を知って判断することが重要であると考えます。